

## 手書き文字の未来のために

上越教育大学 押木 秀樹

## 1. 未来を考える視点として

「手書き文字の未来のために」今、何を考えておくべきであろうか。そのことを考えるにあたり、押さえておくべきポイントを、図 1 のように考えてみた。おおよそ左側は、「手書きする文字そのもの」から考えることを並べ、右側は文字を「手書きすることを学ぶ」ということから考えることを並べた。

漢字の歴史として考えれば、おおよそ 3000 数百年前から、文字は手で書くという必然によって進化してきた。その

過程では、意味・音訓・字体の変化にとどまらず、字形や書字動作の点においても視認性や動作などの点で、より機能的にあるいは合理性のあるものとして変化してきたと考えられる。その機能的・合理的な変化を適切にとらえることは、手書き文字の今後を考えるために大切な点ではないかと考えている。もし、不十分な部分があるとすれば、研究課題として取り組む必要がある部分といえるだろう。

加えて 30 年ほど前から、情報機器の普及により、文字を使用する際に手で書くということが必然でなくなった。欧文についてはタイプライターの普及により時期に差があるものの、文字の歴史が始まって以来の大きな変化として捉えることができるであろう。それらを踏まえ、未来に、手書き文字がどのようなものであってほしいかを考えていくということが左側になる。

右側に目を向けると、手で書くことの教育の歴史研究として、明治の近代教育以前と以後とについて、全国大学書写書道教育学会でも多くの研究結果が確認できる。そして 30 年前からは、全国大学書写書道教育学会も、書写書道教育をより良くおこなうための研究成果をあげてきた。加えて、現代・未来の人材を育成するための「社会が求める学力」への対応、現代の教育思潮に対応するためにも、左側に位置づけた手書き文字の未来像とともに「社会が求める文字を書くことの学力」とその教育を検討する必要がある。

本稿は、手で書くこととその教育について、この左右の視点から現代の状況を確認するとともに、未来のために今すべきことの一例について、検討するものである。

## 2. 教育・学習という視点から

まず図 1 の右側、「社会が求める学力」という部分から考えていきたい。この部分を検討するにあたり、根拠とする資料として本稿執筆の時点では、2014 年 11 月「教育課程の基準等の在り方について（諮問）」<sup>1</sup>および 2015 年 8 月「教育課程企画特別部会における論点整理」<sup>2</sup>が、教育のあり方を考える上で参考になるものと考えられる。筆者は、これらの検討に関わるものではないが、あくまでこれらを参考資料として用いつつ、文字を手書きすることの教育に当てはめて検討をおこないたい。

前者の諮問では、その理由として、技術革新などの時代背景を踏まえつつ、「個人と社会の豊かさの追求」などが述べられており、ここからは「豊かなコミュニケーションのための書写の学力」ということが想定される。さらに、求められる学力として「伝統や文化」「他者と協働」といった表現があり、ここからは「伝統や文化を大切にする書写」「協力して作り上げていく書写の学び」といったことが考えられる。また「一人一人が互いを認め合い」

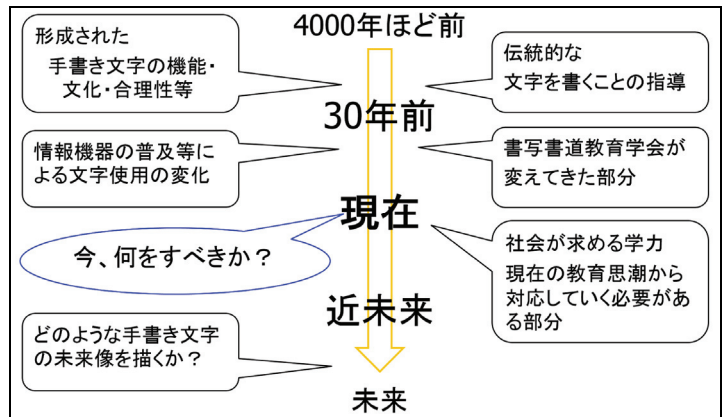


図 1 未来をどう考えるか

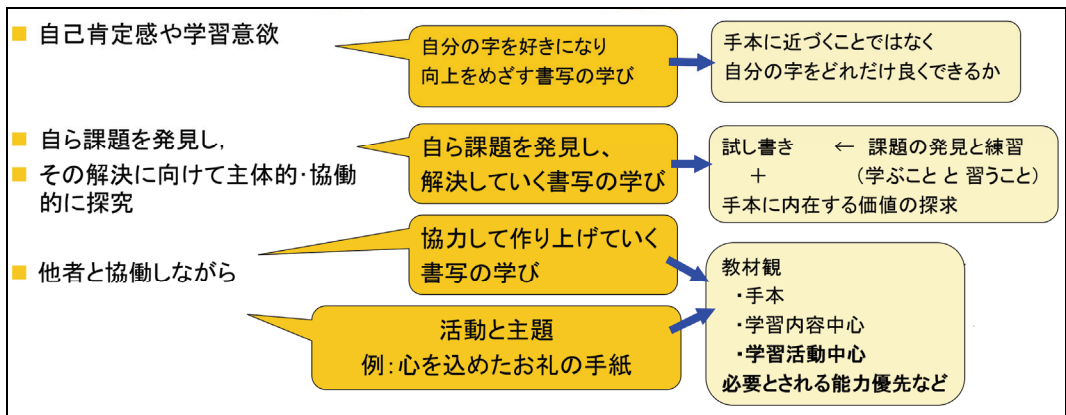


図 2 学習方法等についてのまとめと具体的対応

という点からは、「多様であることを認められる書写」というキーワードが浮かぶ。

さらに課題として、「自己肯定感や学習意欲が低いこと」などが示されており、ここからは、「自分の字を好きになり向上を目指す書写の学び」ということが考えられる。さらにその課題の解決のために求められる学力から、「基礎学力として書くことを支える書写」、「自ら課題を発見し解決していく書写の学び」、「活動の中で身につける書写の学び」といったことが想定できる。

以上について、学習内容と学習方法とに分け、学習方法の視点のみを整理したものが図 2である。

改めてこのように抜き出してみたとき、本学会や各地の研究会、また日々の実践の中で、すでにこれらへの対応を進めてきていることに気付く。たとえば、

- ・手本そっくりに書けることをめざす指導から、自分の字をどれだけよくできるか

という発想による授業は、「自己肯定感を高め、自分の字の向上をめざす書写の学び」と考えることができる。また「自ら課題を発見し解決していく書写の学び」ということについては、これまでも以下のような実践・理論研究がおこなわれてきている。

- ・試し書きをして、手本と比べ自分の字の課題を発見したのち、解決のために練習するなどの学習過程
- ・手本に内在する価値を見いだす思考活動を経る学習過程

ただ、協働、活動といった部分は、まだこれからの課題となると多いと思われる。これも学習過程の相互評価の見直しと発展、学習活動を意識した授業作り、系統的な学習とその結果を生かすという流れに加え、他の学習活動に必要な学力としての書写の学びを仕組んでいくことなどで、よりよいものとしていくことができると考えられる。

### 3. 学習の「内容」あるいは「文字を書くこと」という視点から

次に、図 1の左側、学習「内容」、あるいは「文字を書くこと」自体に目を向ける。手書きの字形や書字行為がもつ機能性や合理性といったものから、その文化的な部分まで、これまで全国大学書写書道教育学会およびその書字学研究会などで、研究が進められてきた。その成果を踏まえる一方、社会からの要請に応える「手で書くことの学力」ということも考える必要がある。さらに、情報機器の普及などによる文字使用の変化をどう捉え、対応していくかによって、手書き文字の未来も変わってくると思われる。

文字使用の変化を改めて確認するために、次の例をあげたい。たとえば、「名前を書く」も「小説を書く」も、同じく「書く」表現されるが、実際にはわかりやすく

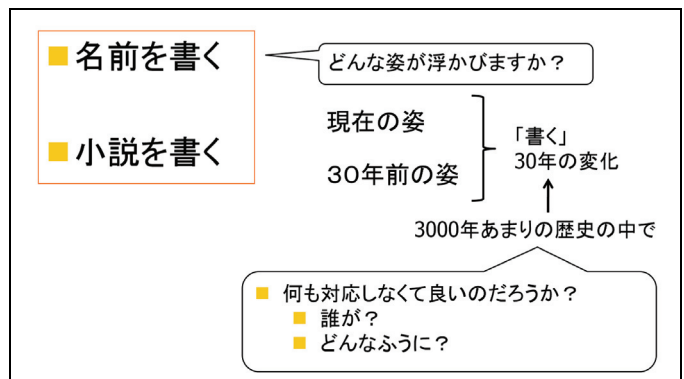


図 3 書くことの変化を考えるために（例）

いえば、前者が「文字をしるす」であるのに対し、後者はストーリーを練り「文章の生成」が主となるといえよう。ただそれが30年前であれば、いずれもアウトプットの瞬間、筆記具を手にして紙にしるしている部分が一致していた。しかし現代においては、前者は変わらないと考えられるが、後者はパソコンで打つということに置き換えることができる。これが、この30年の出来事であることを考えると、三千数百年という（漢字を）書くことの歴史の中で、いま私たちは最も大きな変容の、その瞬間に立ち会っているといえるだ

ろう。この変化の結果が、どの程度のちに安定した状況となるのかは、予想できない。現状がすでにそうであるのか、あるいはさらなる文字使用の変化が待ち構えているのか。いずれにしても、現代において手書き文字を考える我々が、最善の対応をしておく必要があるのは間違いのないであろう。

そのことを、1996年の書字学研究会の成果を踏まえた図4を元に考えてみたい。手で書くという行為は、書く側と、読む側という、コミュニケーションとしてとらえることができる。かつて情報機器がなかったころは、読む側にとっての読みやすさが最優先だったと思われる。現在も、読みやすく書くことは重要であるが、情報機器を用いることで誰でも読みやすい字を作り出すことができるようになってきている。一方で、書く側にとっての良さ、書きやすく書く、気持ちよく書けるといったことの重要性が、バランスの上で増すこともありうるだろう。その意味からも、書く側の身体性や、動作の重要性に着目していく必要があると考える。

さらに、たとえばパソコンやスマートフォンなどのメール等の場合、画面に表示される字は、確かに読みやすいかも知れないが、通常、誰からのメールであっても、同じ字（フォント）である。一方、手書きのはがきやメッセージカードであればその人の字（毎回異なる手書きの字形）を見ることとなる。一人一人異なる字でコミュニケーションが行われるということは、それ自体贅沢なことといえるのではないだろうか。音声言語に置き換えれば、電話から、相手の声がコンピュータに変換された声で聞こえてくると、本人の声がそのまま聞こえてくるとでは、当然後者の方が望ましいはずである。そのことを思えば、音声と文字の差こそあれ、理論的にあてはめて考えてみる価値があるだろう。それが、パラ言語の機能として考えられることである。また私たちは、印刷される明朝体等のフォントになれてはいるものの、初期の印刷は手書きを版にしたものであったり、似せたものであったりしたことも思い出される。

狭義の言語内容だけを伝えればよいのであれば、読みやすさということが重視される。しかし先のフォントと手書きの考察から考えられるように、図4の下左側「パラ言語的要素」の重要性が増してくると考えられる。また、書かれた字の多様性の認識という表現もできよう。

さらに、図4の下右側、書いて覚える、書いて考える、書いて感じる、書くことで落ち着くといったコミュニケーション以外の要素も決して忘れてはならない。

次に、図2の段階でいったん保留しておいた「学習内容」に関する項目を図5に示した。そこには、書くことを支える基礎としての学力、伝統や文化を大切にする書写、多様であることを認められる書写、そして豊かなコミュニケーション

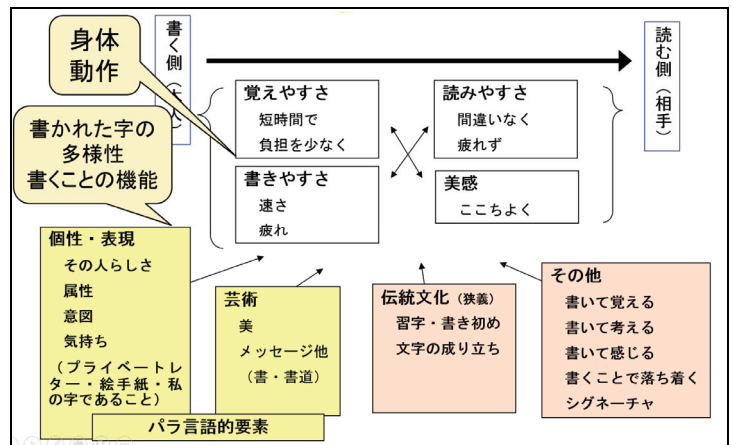


図4 文字を書くことのバランスから考える

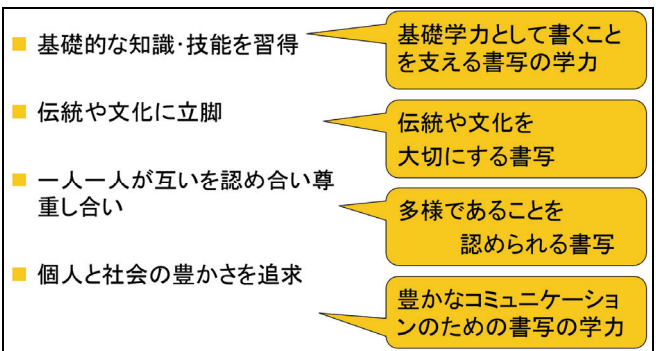


図5 求められる学力として

ションのための書写の学力があげられた。以上の図 4 および図 5 からの考察を、極力まとめて考えようとしたとき、図 6 のようにリテラシー、多様性、コミュニケーション力の3点から考えたい。もちろんこれらには毛筆も硬筆も、その両方をふくまれると考える。

「リテラシー」として、基本的に読みやすさなどの点でよく書けるということ、そして書くことが決して嫌ではなく、気持ちよく書けるということが考えられる。そのために必要な学習としては、字の見目の学習だけではなく、良い動作の学習が大切だと説明できるだろう。またリテラシーを考えるためには、漢字指導と書写指導、それぞれの機能を明確にすることも重要だと考えられ、その点も課題といえよう。

「多様性」という点では、前述のフォントと手書きの差などの点に加え、社会一般の考え方に沿い、一人一人異なった字の価値を認め、自分の字に自信を持って書けるようにしていくための指導の方向性も重要である。

そして「コミュニケーション力」として、書く際の目的意識、相手意識を大事にしたい。特に、相手に伝えようとする伝達なのか、自分のための記録なのかといったことに加え、前者であれば自分の気持ちがあらわれる表出や、書芸術のような意図的な表現といった機能の意識化も重要だと考える。別の表現をすれば、リテラシーのうち、読みやすい字を、書きやすく書けるというという技能部分を、その場面においてどのように使うかという能力がきわめて重要であり、この表ではその部分をコミュニケーション力として分けて表示しているといえよう。学習活動において、文字を手書きする場面も多様であり、どのように用いるかという思考力についてもここに含めて考えたい。また、それらが教育としてどうあるべきか、ということも課題となる。

最後に、「文化・伝統」を図 6 において全体にかかる位置に置きたい。もちろん、単に毛筆を用いれば伝統的だということではない。例えば多様性ということであれば、今生きている一人一人の字がそれぞれに良いという意味で考えることもできるが、長い歴史の中で、日々文字を書くことにおいて多様な美を認めたことが、書芸術がここまで高いレベルに到達している一つの要素である、そういう見方もできる。またコミュニケーション力であれば、現在メールで送ることと絵はがきを送ることとの差といった点もあるが、風信帖などに代表されるようなコミュニケーションの意図が手書きの文書に込められ、伝統的に機能してきたことなども、改めて意識して学習すべき内容といえるのではないか。このように、長い歴史と、現代的視点をあわせて、この文化・伝統という点を課題とした。

#### 4. 未来のために今すべきこととして

ここまでの考察を踏まえ、今、行うべきことは何かを考えたい。図 6 から、課題を抜き出すと次のような点が考えられる。

- ・コミュニケーション力を高めるための書写の思考力の考え方
- ・多様性をみとめた際に、個性の（消極的・積極的）教育の可能性
- ・パラ言語的要素と書写指導の関係の検討
- ・視覚的部分と動作の学習の再認識
- ・漢字指導と書写指導の考え方の再認識
- ・文字を書くことの文化・伝統の明確化

本稿においてこれらすべてを検討することはかなわないため、創立20周年記念シンポジウム<sup>3</sup>で触れたパラ言語に関するだけでなく、リテラシーにかかわる部分を中心に、例をあげて検討することにする。

##### 4-1 リテラシーのために 漢字学習との関係で

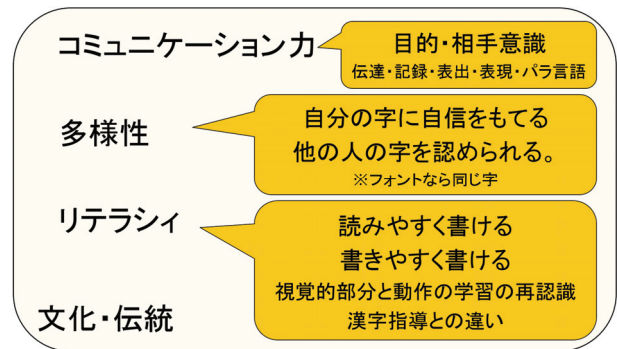


図 6 めざす方向性（学力）として

- 漢字学習: 文字として正しいことと
- 正しければ、どれも同じか？

椎 推 陸 口 日  
椎 推 陸 口 日  
陸

図 7 リテラシー 漢字学習と書写学習



漢字指導と書写指導との関係を例として、検討したい。

改定常用漢字表<sup>4</sup>は、改定の趣旨として情報機器の普及への対応をあげている一方で、手書きの重要性についても触れている。また「平成26年度国語に関する世論調査」<sup>5</sup>でも、手書きを大切にすべきだという結果が見られる。

一方、文化審議会国語分科会漢字小委員会<sup>6</sup>は、「学年別漢字配当表の字形や教科書、漢字ドリル等」に示された字形との細部までの一致が求められる」ことの問題点を指摘している。常用漢字表「字体についての解説」では、「字体としては同じであっても、1, 2に示すように明朝体の字形と筆写の楷書の字形との間には、いろいろな点で違いがある。」ことを明示している。「(5) はねるか、とめるかに関する例」では、「切、改、木、来」などの例が示されている。図7は、それを拡張して示した例であるが、これはどうであろうか。

漢字学習では、意味・音訓・字体を学ぶと考えられるが、字体の判断基準は基本的に正か誤かということになる。では、正しい字体で書かれていると判断される文字は、どんな字形であってもその価値が等しいといえるであろうか。正しい字体であっても、ギリギリ読めるといった字形からとても読みやすい字形まであり得る。漢字指導が、正しい字体で書けるところまでの指導であるとする、書写指導はより良く書けるようになるための指導と考えることが出来る。具体的には、読みやすさや、書きやすさといった、長年積み重ねてきた合理性を持つ部分について、字形や動作には機能性や価値があることをより明確にして、適切に指導していかなければならない。低学年における漢字指導では、混乱を招かないよう、ある程度狭めた字形での指導が必要だとされている。それに加え、正しいとされる字体の範囲においても、次のような機能から字形が絞り込まれることもあり得ると考えられる。

読みやすさ

- ・統一されることによる識別性
- ・整齊さに起因する読みやすさ

書きやすさ

- ・全体の動作としての良さ
- ・形成されてきた合理的な運動

伝統・文化として（上記以外の）

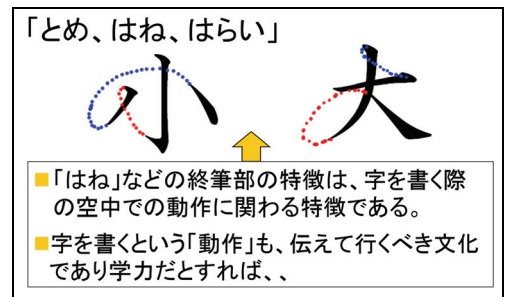


図8 リテラシーのために 動作の意識化

#### 4-2 リテラシーのために 動作の意識化

一般の方や先生方からも、どうして「とめ、はね、はらい」といった細かいことを気にするのか、そんな細かいことばかり気にして指導するから、子どもたちが漢字嫌いになるのではないかとといった意見を聞くことがある。

確かに、止め・はね・はらいという終筆部の特徴は、字形全体からすれば、細かい部分といえよう。しかし宮澤<sup>7</sup>も指摘するように、書字動作として見たとき、終筆部の特徴はその後の空筆部の動作に関わる部分であることがわかる。図8のように、終筆部の「はね」「はらい」の方向がその後の空筆部の動作をある程度決定するということから、字を書く一連の動作の中では、決して小さいといえない機能をもつ部分なのである。

そしてそのことが、広く一般に理解されているとはいえないことも、残念ながら事実ではないだろうか。こういった文字を書く上での理解面もこれまで不十分だった部分であり、より伝えていくべき文化であり、学力ではないか。またこのことは、平成20年小学校学習指導要領から考えると、「点画の種類」と「点画のつながり」という学習内容であり、どのように位置づけていくべきかといったことも改めて研究課題とすべきではないだろうか。加えて、小学校高学年における書字動作の指導として、樋口ら<sup>8</sup>の例のような実践も検討されるべきであろう。

#### 4-3 リテラシー 子どもたちの字により即した指導のために

松本<sup>9</sup>も指摘するように、書写書道教育研究において、字形等を中心とする基礎的研究や、学習過程論などの点では、ある程度の成果をみているものの、学習者の実態や学習効果といった点でのいわゆる臨床的研究とその共有のための枠組みはまだ十分とはいえない。

手本等に内在する学習内容を適切に理解できたかどうか、またそれが学習者自身の字の問題として認識されたかどうか、さらに学習結果として学習者の字形等に生かされたかどうか、きちんと評価することによる研究がなされる必要があるだろう。またその学年で提示する学習内容が、学習内容としてふさわしいかどうか、最大公約数的にであっても研究される必要があるだろう。

例として、上下の部分からなる字の整え方について考えたい。この学習内容については、多くの教科書において、かんむりが扁平になることと、点画の変化について触れられていることが多い。

一方、図 9はある小学校の4年生を対象として、上下からなる字の整え方の学習前に、該当箇所を調査した結果<sup>10</sup>である。字形について、課題を大きさ・位置・形という分類で整理したとき、最も多かったのは、下部が大きくなりすぎる例であった。二番目は、中心がズレていたり、離れていたりする位置の問題であり、教科書に示されているあめかんむりの形がおかしい例は、わずかであった。

調査対象の多くの子どもたちには、図 10に示ような大きさのバランス、特に幅への着目が必要なのではないかと考えられる。これはあくまで一クラスの例に過ぎないが、こういった「子どもたちの実態から、最も必要とされている学習内容は何だろうか?」と問い直すような研究はさらに積み重ねていくことも重要であろう。

また学習内容の系統性の研究成果と、学習者研究の成果との組み合わせ方、たとえば学習内容の系統性を縦糸にして、横糸に学習者の実態をおいたとき、何がどこまで明らかにできているか確認することで、さらに研究すべきことが見えてくるのではないだろうか。

## 5. まとめにかえて

手書き文字の未来のために、主として書写教育において何を考えるべきか考察してきた。課題はつきないが、「どうしたらより良く書けるかという研究」の前に、「なぜ良く書けていないのか」を確認する研究といった、根本的なとらえ直しもあり得るだろう。また教育現場の声に立ち返ったとき、毛筆を用いる授業における準備と片づけに要する時間や施設設備のことなども課題ではないかと考える。

以下に、本稿で触れ得なかった課題のうち特に気になるものを書き出し、まとめとしたい。

- ・手書きによるコミュニケーションの理論とその方向性
- ・目的意識・相手意識を考える授業とその教材
- ・伝達性・表現性を考える授業とその教材
- ・筆記具の緩衝的機能・増幅的機能と教育への応用
- ・毛筆を用いる授業における準備と片付け

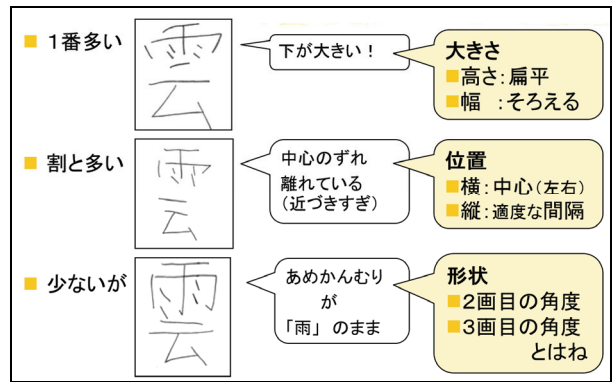


図 9 子どもたちの「雲」の実態（模式図）

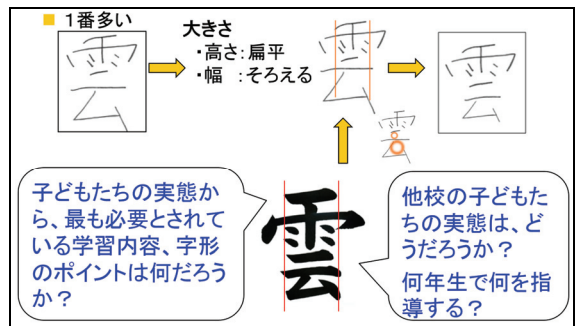


図 10 子どもたちの実態に即した学習のために

<sup>1</sup> 文部科学省 (2014), 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問), 26 文科初第 852 号

<sup>2</sup> 教育課程企画特別部会 (2015), 教育課程企画特別部会における論点整理について (報告) (平成 27 年 8 月 26 日)

<sup>3</sup> 押木 (2006), これからの書写書道教育学: 内容論・教材論の立場から, 書写書道教育研究 別冊・創立 20 周年記念号, pp. 22-25

<sup>4</sup> 文化庁 (2010), 文化審議会答申「改定常用漢字表」, p. 6

<sup>5</sup> 文化庁 (2015), 平成 26 年度「国語に関する世論調査」, 文化庁文化部国語課

<sup>6</sup> 文化審議会国語分科会漢字小委員会 (2015) 「手書き文字の字形」と「印刷文字の字形」に関する指針 (中間報告), 資料 2

<sup>7</sup> 宮澤 (2015), 基調講演『手書き文字の果たしてきた役割とこれから』, 第 56 回全日本書写書道教育研究会 東京大会

<sup>8</sup> 根本・樋口 (2012), 小学校での速書きに適した書き方を習得するための授業開発, 全国大学書写書道教育学会京都大会口頭発表資料

<sup>9</sup> 松本 (2015), 筆記具の効果的使用をテーマとする書写教育研究の史的考察, 書写書道教育研究 29 号, pp. 54-64

<sup>10</sup> 飯田 (2014), 部分からなる字の整え方に関する研究—教科書における学習内容と小学生の実態—, 上越教育大学卒業論文